

# いのちとの 伴走

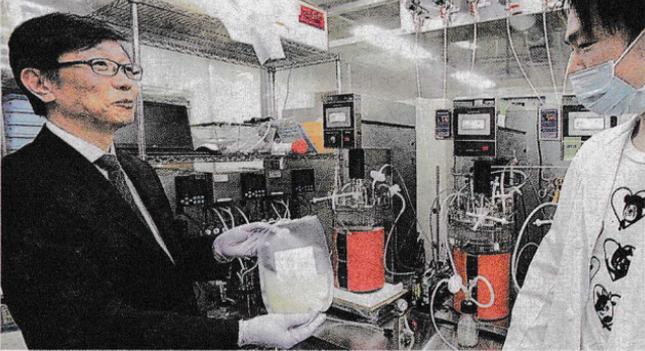
## IPS細胞誕生10年

### 第1部 葛藤する現場⑤

実験室に並んだタンクは管でつながれ、中には赤い液体が満ちていた。「ここでiPS細胞由来の血小板を作っています」。ベンチャー企業「メガカリオン」(東京都)の三輪玄二郎社長(65)は京都市下京区のオフィスで、出来上がった血小板の入ったパックを手にながら説明した。

iPS細胞(人工多能性幹細胞)

iPS細胞からできた血小板を手にする三輪社長。大量生産のための技術開発を続けている(京都市下京区)撮影 船越正宏



胞)から作った血小板の輸血は、目の病気「加齢黄斑変性」に続

# 実用化へ

いて臨床応用が近いと注目を集めている。輸血に使われる血液は、今のところ献血に頼っているが、少子高齢化のため2027年には献血者約85万人分が足りなくなるといふ試算がある。

iPS細胞から作った輸血用製剤は、献血不足の解決策となる可能性を秘めている。

投資が専門の三輪社長が再生医療の事業化に関わり始めたのは08年。高校時代からの友人である東京大の中内啓光教授(64)と、同窓会で約10年ぶりに再会したのがきっかけだった。

「iPS細胞はすごい発見だが、日本ではうまく実用化で

きるか分からない」。iPS細胞から血小板を作る研究に取り組んでいた中内教授から相談を受けた。産業として成り立たせるには資金調達などが必要となるが、科学者にはノウハウがない。「私の経験が役に立つかも」。産業に育てる準備を始めた。11年には、血小板を作製する技術を開発した中内教授や京都大iPS細胞研究所の江藤浩之教授(53)と、同社を設立した。

事業化が目的の同社では、最初から治験を目指している。「日本と米国で、来年には実施の申請をするつもりです」。三輪社